

出土遺物—人々が残した生活の痕跡

土器・陶磁器 柱穴・井戸・大溝等から出土しました。国産陶器の出土量が際立つ一方、土師器の出土は少なく、数片に限られます。国産陶器の大半は瀬戸・美濃焼(折縁皿・丸皿等の小皿類や挿鉢が主体)で、それに備前焼・信楽焼・常滑焼が続きます。また、中国産磁器(青磁の梅瓶、白磁の皿、青花の碗・皿等)も少数見つかりました。

瓦 大溝内・井戸等から出土しました。大半は丸瓦・平瓦ですが、わずかながら軒丸瓦・軒平瓦も見受けられます。これらは焼きが甘く、厚みが薄い特徴がありますが、それは山上部で出土した瓦と共通します。

その他 大溝からは土器・陶磁器・瓦以外にもさまざまな遺物が出土しました。溝の堆積土からは小柄(こづか:長刀に付属する小刀)が見つかりました。また、溝の底付近からは多数の石仏や、五輪塔の部材が投棄されたような状態で出土しました。

まとめ

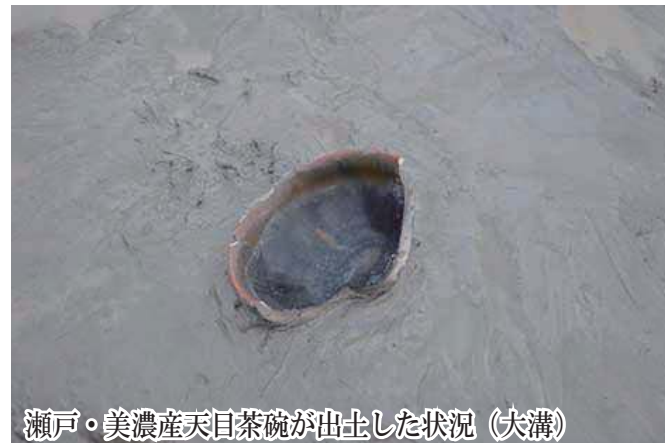
◆今回の調査の成果を以下にまとめておきます。

- ①城下町関連遺構を検出 本町筋沿いを中心に城下町が展開していたことが明らかになりました。
- ②内堀の構造・土塁の残存状況を確認 従来、絵図等から推定されていた内堀・土塁について、その規模・構造等に関する手がかりをえることができました。
- ③絵図にない大規模な溝を検出 この大溝は内堀と外堀との間をつなぐ位置にありました。絵図等には描かれておらず、あらたな発見といえます。その時期・性格についてはさらに検討が必要ですが、現時点では、もともと自然の河川があって、そこにある段階で人工的に護岸が施され、さらに本町筋沿いの城下町が建設される段階になると人為的に埋め立てられたという過程が判明しました。出土遺物から埋め立て時期は16世紀終り頃と想定できます。これを城下町建設時期とすると、石田三成が城主であった文禄5年(1596年)の「佐和山惣構御普請」(「須藤通光書状」)と符合します。

◆佐和山城跡の調査は次年度以降も引き続き実施する予定です。今後も機会を見て調査成果を皆様にお知らせしていきたいと考えております。今後ともご協力くださいますよう、よろしくお願いいたします。



瀬戸・美濃産瓶が出土した状況(大溝)



瀬戸・美濃産天目茶碗が出土した状況(大溝)



軒丸瓦が出土した状況(大溝)



五輪塔・石仏が出土した状況(大溝)

佐和山城跡発掘調査地元説明会資料

平成31年(2019年)3月2日(土) / 公益財団法人滋賀県文化財保護協会

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



遺跡の概要と調査の概要

遺跡の概要 佐和山城跡は彦根市北端に位置し、南北約4kmにわたって連なる佐和山丘陵の中央部に所在します。東側には近世の朝鮮人街道(下街道)と近世中山道(東山道)が通過合流し、西側には松原内湖・琵琶湖をひかえた水陸交通の要衝でした。約1.5km南西には特別史跡彦根城跡が位置しています。石田三成の居城として知られますが、その歴史は古く鎌倉時代に遡るとされています。戦国時代には江北の浅井氏と江南の六角氏との境目の城として抗争の最前線となりました。その後、城主は目まぐるしく替っていきますが、石田三成が城主の際に城は最大規模になったと考えられています。関ヶ原の戦いで三成が敗れると、徳川家康の家臣・井伊直政が入城しますが、慶長9年(1604年)彦根城の築城に伴って廃城となりました。

調査の概要 佐和山城跡では、これまでに彦根市教育委員会・滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会によって、城跡の各地において数次にわたる発掘調査が行われてきました。城跡は山上曲輪群・山麓曲輪群・城下町の3つの区域に大別されます。このたび、遺跡の範囲内において、国土交通省近畿地方整備局滋賀国道事務所により一般国道8号米原バイパス工事が計画されたため、それに先立ち城下町地区の発掘調査を実施し、現在も継続中です。調査の結果、内堀や土塁をはじめ、建物跡・石組井戸等といった城下町に関連する遺構を検出したほか、それらに伴ってさまざまな遺物が出土し、佐和山城跡の城下町の様相をうかがう手がかりをえることができました。

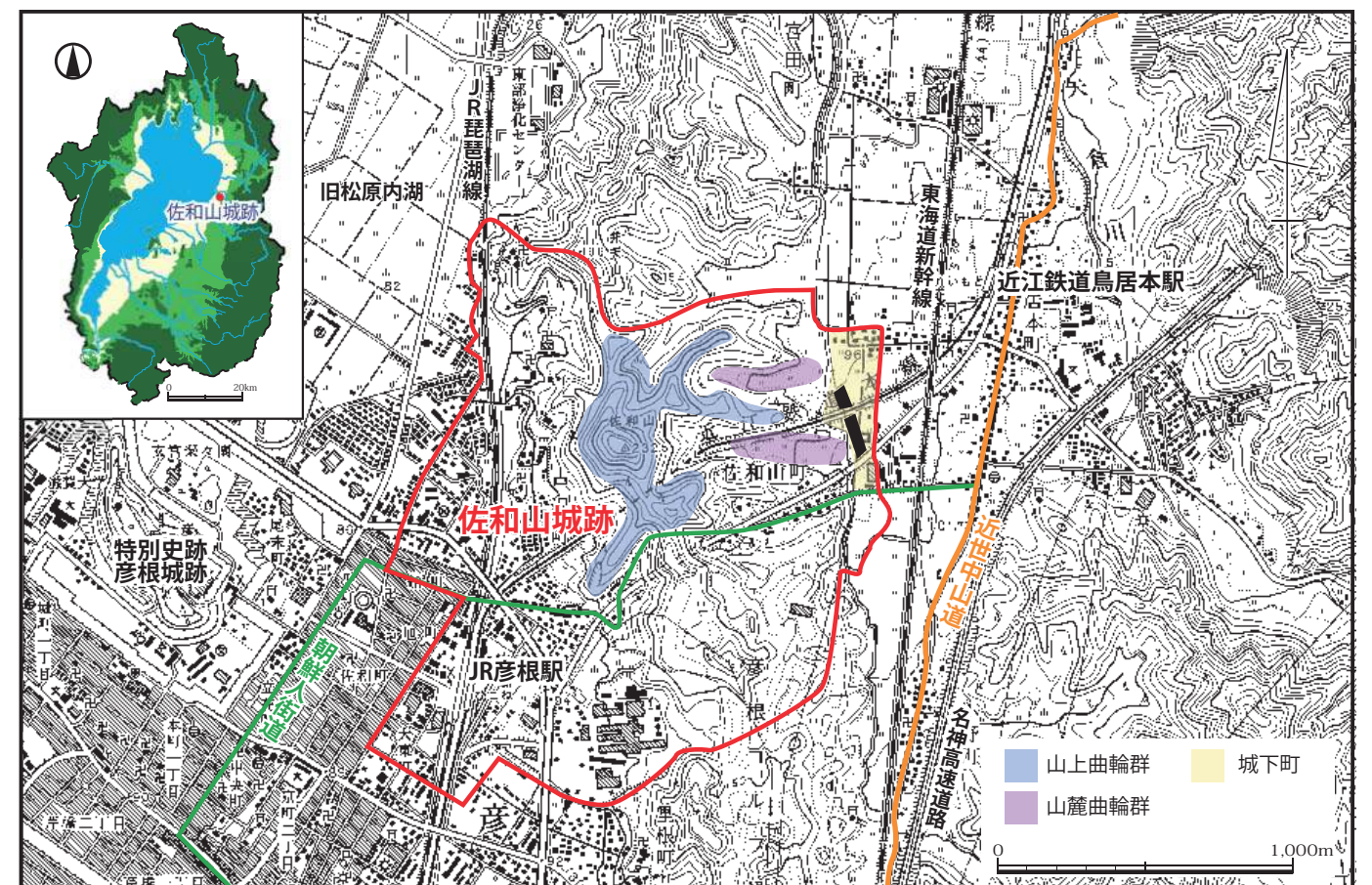


図1 佐和山城跡の範囲(赤枠)と今回の調査地点の位置(黒塗)

遺構—過去の人々が残した痕跡



検出した土塁とその延長線上につづく農道

土塁(III-5区) 佐和山の東麓には谷部をせき止める形で総延長約160mにわたって土塁が想定されています。その西面には内堀の名残とされるおまん川(小野川)が流れています。これらは天正13年(1585年)に入城した堀尾吉晴によって構築されたものと考えられています。今回の調査においても、部分的ではありますが、土塁を検出することができ、土塁が現在も農道等の高まりとして遺存することがわかりました。さらに、土塁の北側には内堀と想定される遺構が検出され、従来想定されていたように内堀が西側へ屈曲する可能性が高いこともわかりました。

大溝(I-1区) 幅約7m、深さ約1mの大規模な溝です。底部の高低差からみると南東から西に流れていたと考えられます。南から西へ大きく蛇行していますが、断面形状が台形に近いので、元々、自然流路であったものに手を加え、人工的な溝にしたと考えられます。また、少なくとも一度は改修が行われていることがわかりました。城下町建設に伴って埋め立てられており、埋土上面には掘立柱建物の柱穴が掘りこまれています。水路として機能した時期の堆積土と、その上部の埋め立て土から出土した遺物の年代はともに16世紀末頃に位置付けられ、明確な年代差は認められないので、比較的短期間のうちに改修・埋め立てが行われたと推定されます。なお、最下面からは多数の石仏・五輪塔の部材が投棄された状態で出土しました。



埋め立てられた大溝の上面から掘りこまれた城下町関連遺構



大溝の検出状況

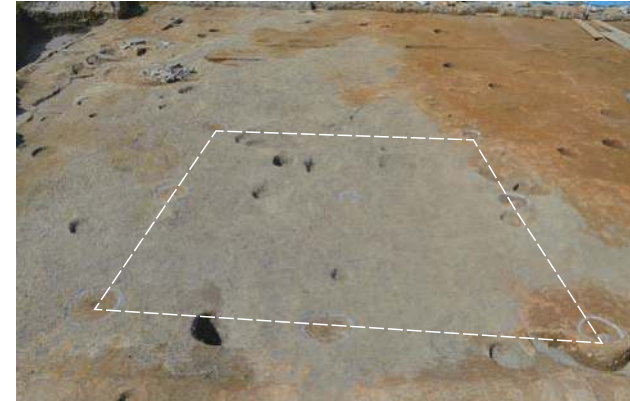


検出した内堀(II-1区)

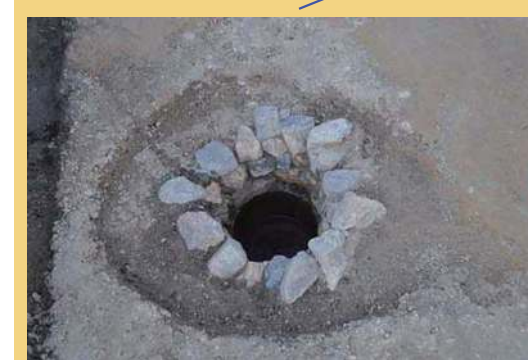


検出した内堀の屈曲部(I-5区)

内堀 I-4区・I-5区では、現在のおまん川とほぼ平行して屈曲する内堀の北・東辺を確認することができました。また、II-1区でも、小野川(おまん川)とほぼ平行する内堀の東辺を検出しました。これらの成果から、内堀の規模は幅約25m、深さ約0.7mであると推定できました。



掘立柱建物(I-6区) 各調査区では多数の柱穴を検出しましたが、建物跡として復元できた例は1棟のみでした。2間×2間で、主軸の方位は北から若干西へ傾き、本町筋の軸とも揃っています。



石組井戸(I-1区) 城下町の町屋において生活用水をえるために掘削されたと考えられます。I-1区で2基、I-5・6区で2基、合計4基が見つかりました。いずれも井戸枠は佐和山周辺で採集できる自然石(チャート)を積み上げて作っていますが、なかには、それ以外の種類の石(花崗岩等)や五輪塔の部材を転用した例もありました。

